

天隨十七字詩



特別
14
3152
65

60

55

50

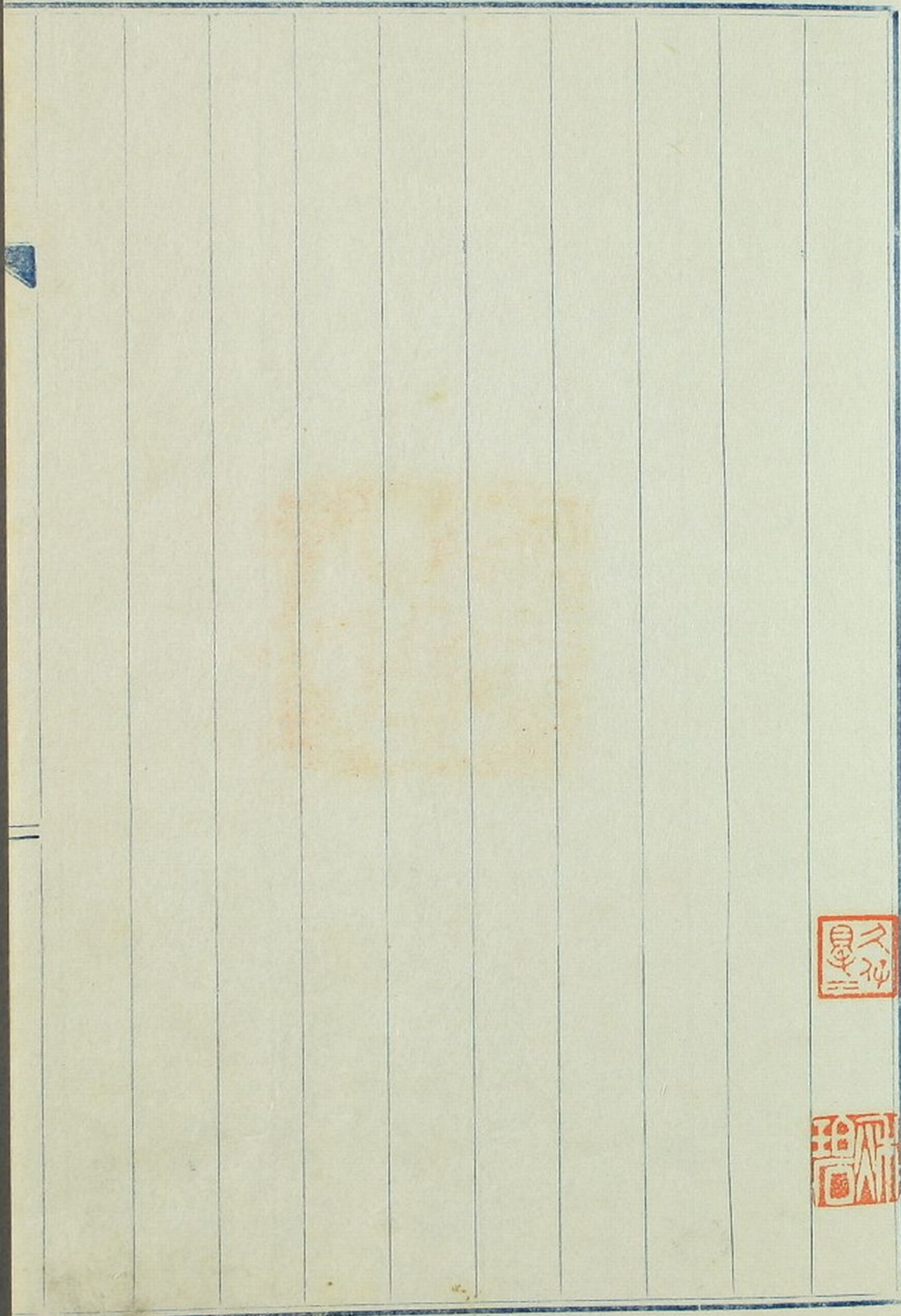
45

40

14
315.2
65



95-122



野霞一片



むかひ五城の學宮に在りしとき四方を繞るの二子と文
 と結ぶを得つ渠等は俳句を以て正に名を成し吾は待
 ち以て聊か同人の間に知られざるがうきことある偶然
 の事ありして初め所長と文摺し去来をむは兼
 修して見むらふ議の起りしときあり實は吾の面
 白づくよりして吾は俳を渠に學び渠は詩を吾に問
 わせりてやうぬからと數月の後兩者ともた物に成るや
 けはむむら見えざるまことや人に能あり不能あり唯だ
 性の如きところは今更に曲ぐべしんあらず神代のおか海



の幸と山の幸とを易つて尊が兄の釣針を失いむい
 りしをなむとて文とよみ見えつ切は西の國の鯉の
 伊小の物傳。中に鯉は深き遠まむしと持入と
 ぬれははた浅き田に釣ひやちよとんをさし思ひ
 せと一見一止みぬるのれに課のやうしと作し
 俳句の数はいふはありけむ今にあすもものはる
 には過ぎぬるそむその點にちらぬものみとあはれ
 を格りやり毎まよえせつた日の間を備むるのあ
 つぬる物証はまやうちとあかあ物なをえあつら
 情こそあはれ

野花束にかすむ筑波の高きす餘
 春雨や晴明る白齋戒す
 花ちるや堂守ぬる様の上
 馬つなく蘇小のいのちやなきが
 散る花を女の下駄の重きか
 梅二三本水竹藪をさかかけり
 物おもひ昔昔にうとありさ
 夢を去り涙に月の細く出し
 鷗啼啼つて向の白暮るし焼野が
 夕暮を焼野に鳥啞々と呼ぶ

思戀

春風や道人能楽寺に
寺に雙む社に休みあるの旅日に七里
菜の花の鐘に暮木より东山
梅白く柴門に流水依れど
虚空花より頻伽鳥舞おきよ庭
山里や梅の村の村の村の村
永き日や柳の家の家の家の音
茶煙や野店の前には茶の花
赤風や象檻外に鼻まの
詩に狂し酒に狂し今花に狂す

瀧の上や若黒くしつじ
白濁濁く浄く赤濁濁く
植平屋の濁濁の茶をさす
濁壺に精よく蝦をけり
姉貝をあきり妹石をけり
わくらあに淑女に逢いし
敷畑も一人おつさり
人招く眠君村の柳
鶏子さか下草うら
園遊に御妓の名をかき

名の傳せし山にて
飯盛山

樓と樓の中を流るる春の水
春の夜を一壺の酒に酔ひけり
永き白戸旅人上る茶屋臺
燈百級鐘樓ありんさらさらかな
花の上の電燈目もさし
花周徑あり、意中の人のあは
しんれと暮あらしのさよふかや
桃の宿着る女のさくら ~~あは~~
所中ん梅一本のカーりあな
山吹や暮あらしのさよふかや

古道の草花のついでに
おはぐれ 観音堂のさくらあな

時鳥月長松にさつる山
ほしとがさし庭は松をにぬけけり
一歩かきくも及野に友と相失り
涼しき夕涼みちし月出づ
まぼろしや花はさかすまはさき
ちし原らと 獲子原まぬ小石原
浦風や 須磨の古屋のまぼろし

龍川 ゆふに二十日のまりの 月をぬ
川 待や 回更のよの月を待
川 待の 曉す あを名残かや
葉柳 や 丁に おたの 船音清
牙 りの 改 ら ぬ より 怨 の 怨 を
燒 の 假 な たらん い 雲 の 雲
雲 の 峰 地 獄 谷 より か ら ぬ ぬ
く もの 峰 書 の 號 記 市 の 雲 お
凌 雲 岡 の上 に 雲 の 峰 の ぐ ら ぬ
鳴 る 神 は 雲 の 峰 の 箱 の ぐ ら ぬ

薩南 の 中 に
喜 の 妙 の 端

信濃 詠 や 菜 の 若 き 花 は
修城 の 甘 帯 に み ち や 鮎 を 産 す
去 来 館 を 産 し 其 角 酒 を 産 す
石 の上 に 僧 書 を 産 し 目 醒 の ま
見 て 物 の 銅 羅 か は ち や ぬ の 月
戀 と せ し 昔 に 旅 は け こ ち に 産 す
秋 風 の 三 日 に 旅 し こと を け り
旅 の 里 も 財 物 も 空 に ま ち に 旅
病 の 馬 を 河 原 に 疾 ち の 風

頂^り一^つ姑^の日^待了^る胸^根か^は
道^一す^は枝^時は^水が^入り^かな
蒼^春の^花流^雪の^門田^の相^見
新^きら^た流^流苗^に吹^不一^港か^は
部^とら^て獨^らぬ^る夜^のを^また^か
指^くも^の旅^かす^さ方^日相^見
秋^風や^畦に^ほい^り一^まの^茨
か^は稻^の裏^道独^一暮^のの^自
は^幸の^とも^し尺^から^ぐ石^か下
誰^か暮^らん^身塔^坐朽^ちた^るす^まま^が

新^島婦^に夕^は門^の御^ちる

木^枯や^山の^海の^心
木^枯や^五剣^の山^の海^を流^す
初^霜に^初づ^めた^さあ^なか^は
後^る日^や寺^の後^の糸^の木^原
と^もし^見え^て巾^のぬ^海の^しく^小雲^か
銀^輝り^時を^ぬく^し時^もか^は
梅^のち^やあ^らじ^の顔^の刀^創
は^西に^我か^影長^きか^小路^かな

我があゝとに弦音ひびくかみ路かな
おみこのはと道義あつ下のちかみかな
病で村をめぐるとはしおふふ立
残菊や紙すく家の窓の下
善き人に心あかるく火籠かな
わの目お見物る離れけり
我が眉の白きを仰びしお義
を義在家の僧とありけり
道義のこ古井戸つ産せけり
道義の白髪を染めよお義

神無日 銀雪の雪のはらぐ
舞草のや。皇統の老の紙をが
鏡刀荒紙。減り音なきし
待てとてのゆの紙を招を遊
新田の三十句の 激凍る
修行者我後髪白く脚をたせ

金崎町

金崎の岡に丸太のなる所かな

金崎の河をわたつて桑田

をわたるにまはらさう城の跡

をどきの古道を林のうらみ

をどきの道にみちをたづねて

をどきの道にみちをたづねて

白石城址

小瀬の水

村邊まで細細くやが木立

流三叉流出さうな村野かな

穢る小屋にわづか残やう小瀬の水

三増峠

天竺花枯野花風にまらけり

日も暮く雲深き分るぬの風

馬の習ひ水に泥の山はかな

春を待つ山市販お日影かな

日あさうや佛師が縁の水は花

仇者の河を渡りて詔印かな

蕨畑を刈り残して遊ばし

細道を埋ちて道なきは昔は

風ささし一里が程の小倉を

方丈の窓らけの掛茶屋

寺荒れしをの花垣の夕の
 僧存す仲はちりぬまの
 石さむく雲何處か
 ぬぞ山の峰もあらはれ
 鬼筆のあはれ霜に調みし
 うまの寝しから抱く大鐘を
 破れ言や 僧法本あの日
 霜の聲 竹一づかき山家か
 懸崖の崩るよわりのおぼし
 山嵐や南風のつゆ雪
 伊崎

垣垣ん免董せしと海を
 路のあふ金のまは鐘せし
 風やうん電線うたる 杉野の
 雲飛んで野を平向の白を
 壁を隔て誰をき夜の
 鐘凍る ぬまを 雨はよるかな
 誰かあの方をきとめたる満
 来者風や東へしりり美あ年
 日あたりや 女狐あらかる
 梅咲る下りしりは藪の書
 の月

若松

たまりしや材木巖下春の水
跡大を畑おつ男者存少せり
雪残るこの里梅は楊柳も
つ小もぢく山分衣あるさむし
春の日のさう杉の間の大御座
芝居小屋の古き職や春の風
せのあゝる悲歌撃筑の人や誰
城址も花をさ春をさるく鳥
葉の花やカもの杉の二三本
温泉の村へ流す水の柳かな

勾欄の美女もつらつ春を思ふ

碑十丈杉の奥の春をさじ

飯盛山 知らぬ魂は昔かよは桜ちる

波漫字風をまぬきさ海の上

ゆりこのに鼠と寐さう宵の春

安達原 鬼住み一岩屋の前も桜かた

月こもを我が麓あるの名残かな

水戸看梅 風流は出かけのささ梅見かな

春の日はさす女座の屋根や満園屋

刀根川の末は霞めく白帆かな
夢の中ん草花種花咲くこころ
わが心から流波の山は光あかな
如かきよ此處梅影ん入るの山
船影こ梅の影のあやめ
出て遇ひし益美美やう梅の花
梅咲いてあやめた守の茶亭あな
都人梅の影こまきやうあな
春の影を神隠やうあな
燭をこき酔いしせ下田舎酒

破ぶの秋の影いかに海雲の影
春の影を酔いて閑やう舞いあな
こころあやめ流波んぼりや春の雪
文君の酒賣るる店や春の雪
欄干に灯かやう春の雪
流波の影さむけー春の雪
倚り添いして白うつ春の影あな
金屏に氷かやう春の雪
梅を見て春を流こころあな

大磯の一夜

行く春の旅する男異名呼ぶ
柴咲いし河原は露さるるか降る
産畑の青麦拂ふ風かな
度々の大文字をいおぼせり
方る赤き花の白みけり
春く小いこの山や杉の苗
土橋あり石碣二三座ざくら
行く春のるにほろけし草花の
甲斐や那の遠らん見え行く春や
行く春の大磯小磯海苔も

酒盛の續りて春のねとす
三木の絲切少く縁首を春の
妓をいこ善く話す春の
酒にめく春のあはれや舞の
酔りて春のるるな覚え未
春のる唱家の灯つるころ
大磯の昔のふかあるのる
光に映ひし藤をいこ春の
櫻々の縁のあはれを春の
春のる思ふるねとす

春のおもひに酔の早痛か
 春の夜の静座敷や鼓の音
 床から詩を唱す春の物
 春の夜の蘇ふはあはれかな
 春の夜を白故に睡むの物
 春の夜のやがて悔あをむの物
 春の柳や停車場前の茶屋三軒
 街道下を走る車と煙
 春の夜の汽車の煙のあはれ
 鐘暮るる上野は春の夜かな

春の夜のやがて悔あをむの物
 春の柳や停車場前の茶屋三軒
 街道下を走る車と煙
 春の夜の汽車の煙のあはれ
 鐘暮るる上野は春の夜かな
 春の夜の蘇ふはあはれかな
 春の夜を白故に睡むの物
 春の夜のやがて悔あをむの物
 春の柳や停車場前の茶屋三軒
 街道下を走る車と煙
 春の夜の汽車の煙のあはれ
 鐘暮るる上野は春の夜かな

庭前や塔籠ちりし花の死
汗ぬいで涙跡にばし立たあか
夕葉や河波ひろく風涼し
二階の女らんまやまらすたれ
陽崎や土藏をいひし大酒造
方すたれ若縁酒をいひしあか
涼しや中銀燭酒の心と射の
友と酔つば深井のあつさちりや
別毛はぬこも書道の心を書きし
書道の心はぬこも友と愛すべし

涼しさを桐てんき月ほしと秋
むん歌の残しと涼し高松舟
今昔誰小江島の上にはをゆ
月しりこもお柳をよぐはかな
水難なく向の岸の暗をわか
朝露の味かーは戸風をさ
雨岸は麦の朽風をいひこ
曇る白もくさくさや蘆下里
悲歌ものまらぬをいひこ
利根川に盪洗を雲の峰

舟板の鯉のはねくさの峰
鯉の膽まるり後の酒凍し
涼しき中四の羅小の鯉の肉
張順のーたり顔なりすみね
延て書痛の面の愚者のかた
かすむ野を遠く砲車の響か
十字坡の酒亭李の月夜かな
山高徳奥おんつく若母かな
蘆十里翡翠一お苦はるる
け夫人様の微毒の僧着し

すりー風を野の響か

草津の勝

氷粒石楠 石楠花や雲の冷たき石一つ
石脚御頭 巖黒し躑躅の白と赤と黄と
御蔵杜若 ほとがす浅間白根の雲と雲
暮唐暖涼 女つれこ小説めし涼かな
圓山栂月 月天心地に我が野の松の影
仙溪錦帆 漱りしと谷の しの紅いあな
深草夕照 日何黄い浅間暮れゆく小春の
終夜露雪 雪霽少し産ん一杯の松奇なり

葎か藍の水ん白魚群るゝあな
 常小不しと然ん乾きし観あな
 石磯や大江の夕日暮ん日暮る
 唯多ぬ物音りけり夜よの杜
 赤崎城十坪の庭の天午せり
 涕をくぬば一枝の芙蓉のな
 細きしし蒲柳の竹枝るゝ秋
 初虹やう脚斜ん伊是におよ
 由良の月に掛け候しけり春の虹
 初虹や山が峽るゝ家小さし

葎か藍

西の虫

初虹や帆影ほのかん沖晴し
 閑んせしと酔後の車道の虹さるゝ
 黒塚の麦伸びずしと秋のたる
 早し女の頬を彩る夕日わな
 若き者しと城の園丸るゝ見日
 短夜の夜更を削りしとるか
 夕風の極浦にほしと雲の峰
 夏の月金波を碎く水あな
 かかり見し海樓高く燭涼し
 酔歩進し風を捲くし風涼し

大宮の園

江島

社戸明神

川口の^の備の^の子風や星降し
松枯小こ宮あはらむ。暑はあを
神あや 鏡のそら青の風あま。
若葉あしと他浦にこく山低し
雪解の雪路に残る部はあな
雪解の村ん雪死の導あな
紫陽花やる暗くして交の隅
しおあしと長者の約の期ん後
五月の山のほま本音あな
空月や路さわく城の門

東山忌

今宮は花の残りぬ二百年
東山忌石像ちりて 灯の狂お
人形の^の或ちび姑る泣くこころを
妻^の祝

和国白龍の母
二年を
復すの途
る有

神司^の名鬼子
神

君あや 賤の伏座の 菊あま
如白まより 平安城の紅糸あま
一とす、けし 浮世の 枯んたる
君あ行く 旅泊の 涯や 雲の峰
心せよの 韓山くらく夕立ます
歩違えとくしと下向の人の日傘あ

相見い値さ

爛々し斜向金更及木立
わらうけに品坐興あり及座敷
折々は笑を隠しりるゆかた
わびぬや不更を詩に疲す男が
相見よる十年白やしほよ
五車の反古竹千羊の巻よし
いざさらは我が俳協の歌物か
塵一つ浮又ぬ宿のふ春の女
雲の影ほよ枝の樹いろし
遠山の村の入り下稲草なり

梅のよ

三青

はゆ

益の梅

白梅や東道の人 俗ならず
阪をちりて梅の中なる屋敷かま
目あたりや扇の斜面の梅或群
倚り添うて光が撫す梅のふり
石をもちて梅を啄く梅の老木
梅白く扇の影ほのかきり
梅遣の梅左折し一門に存
姿をかつ散る梅の忍ぶかま
扇の上ん羨嵩けゆる野梅
鳥啼かす遠る梅静い梅暮る

頃
生
三月相
山

かざしに白桃の花
春の山おろし草
春の山見え
春の山地獄
此の山
知後
春の山

酒
一
第
め

偶
後
田
橋

縣女の髪解く
紫壺に女あつ
梅咲く博士の
花
ある

賊船の臺に寝如笑のあな
眠るの節に女のけはひを
弄笑いで僧起は端の島を
若知や一恒々また西靴に成す
院にても出を懐と連る夢
おほある夢島に下るふ舟
初夢のこころに夢をけし言あせ
まぬ中にも居る夢の人かす
ねをの風車に寝るもむす別念
床のこりの晝静かすも夢のこ

伝言の中

わらわけに假し夢の床中夢の言
流木に海の有明月夜海深し

西宮元旦

神の國天皇の國の初白かな

正月の夜

招魂を焚くいありの紅雲か

注がぬん酒の畑とねを焚く

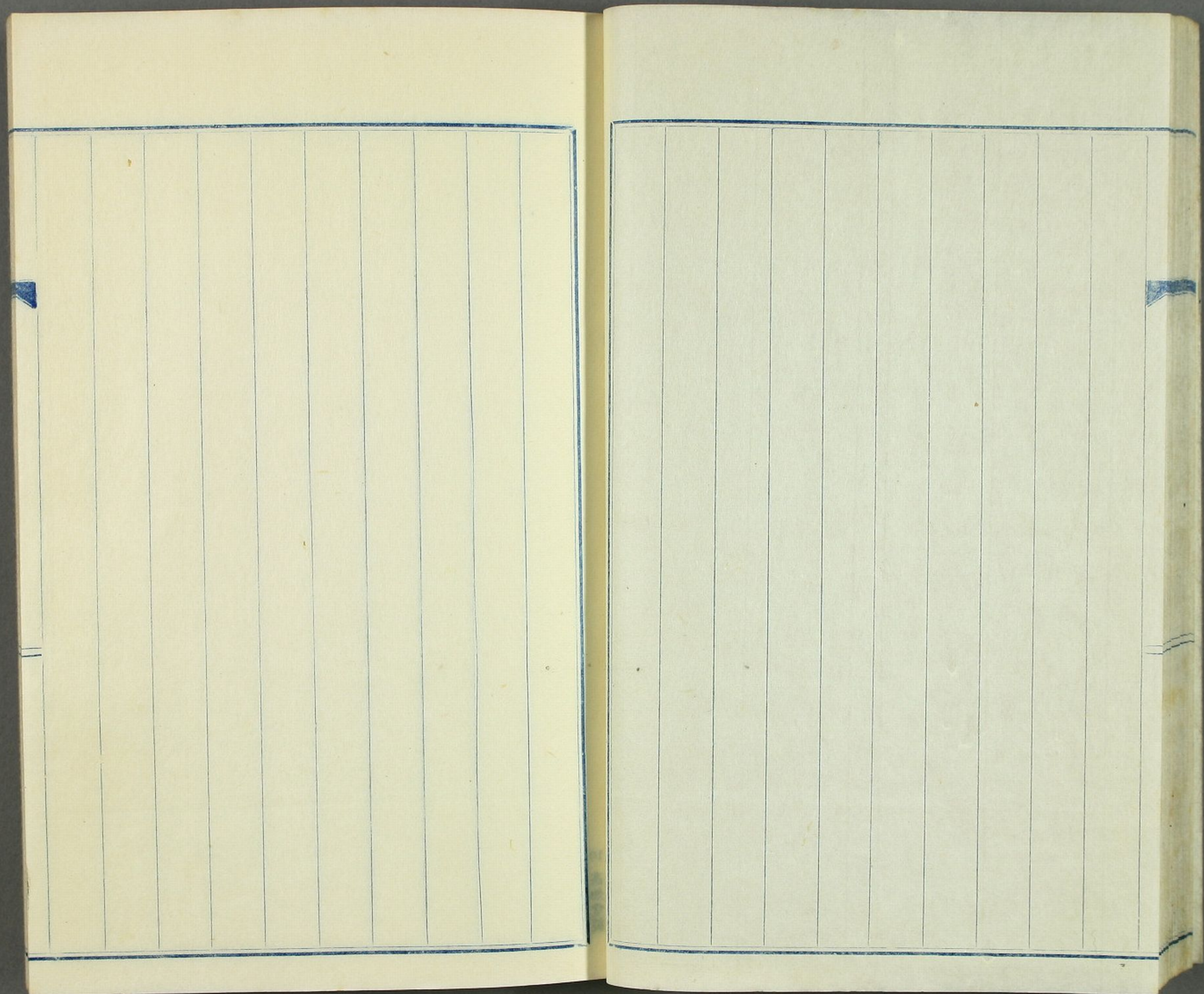
極北達使の下向の道や若知し

宵月の雨倉の陰まををし

早吉おまは階よりこ返三義

夢中おまは靴を草をふ

初午の水村の御旗



以下
76 丁
白紙

山やかみ雲の音まはるに霞に向いて音いそいで立つ

卷老親溥

夢殿の林の夕々水我ひとりたすみ片水む物思ひもなし

法隆寺

風やから春思の煙のしら飛いでせる年のあけしあもほ

白筆

有りしやはあのかゝん獨りまじけの空を憂いたまひらむ
ありし日は鼓の風の形を夢と結はるおぼしにすまはる

鼓風

大空にいさよふ月此影さえておぼかあまの如流の
へーらぬ浮舟の舟もとけやある誰んか林は手折れりらむ

如儀はて

こゝろの心の鼓のねかり大の見えあまの世はまやむやたら
ありかや旅の舟のこりしに杉の木は影の流るゆめ
かよひらんむしき年のあけお小ておぼしきあつて今もぬ

相模の海方島をよむ流し島の異の力たけくもあはかな
人を悼み世をみつくは酔はず牡丹ふつふたる暮し
五桐のたきまの上方をたぬ梅雨はるしの夕まぢりも
今井相模守を悼む

わいもあはれをよむをよむとて山邊に文を書かぬもあは
君癒えと都の山辺を極するふ初めたうをよむを悼むと
今井安巳の伊豆に在らんまぢり

あはれをよむをよむをよむとて山邊に文を書かぬもあは
君癒えと都の山辺を極するふ初めたうをよむを悼むと
今井安巳の伊豆に在らんまぢり



